



Title	戦後日本華僑の「新中国」イメージとそのアイデンティティの可塑性：帝国日本の残照と「我愛我的台湾」
Author(s)	岡野, 翔太
Citation	現代中国. 2017, 91, p. 87-101
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/70602">https://hdl.handle.net/11094/70602</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文

# 戦後日本華僑の「新中国」イメージと そのアイデンティティの可塑性

—— 帝国日本の残照と「我愛我的台湾」 ——

大阪大学大学院 岡野翔太  
(葉 翔太)

## はじめに

本稿で取り上げる「我愛我的台湾」は、1950 - 60年代にかけて日本に居住する一部の台湾人や華僑の間で歌われていた歌謡である。

その原曲は、台湾語（閩南語）歌曲「新台湾建設歌」（薛光花作詞）で、1946年に台南出身の許石<sup>(1)</sup>が日本から台湾に戻った直後に作曲した。この曲に「我愛我的妹妹啊」で始まる別の歌詞をつけた歌謡が「南都之夜」（鄭志峰作詞）であり<sup>(2)</sup>、「南都之夜」は「台湾光復後、最初にヒットした流行歌」と言われている<sup>(3)</sup>。

その後、「新台湾建設歌」の旋律は中国大陸にも伝わり、1947年の二・二八事件<sup>(4)</sup>を契機として「誰知狗猪又來，台湾成苦海」という句をもつ台湾語の歌詞で歌われた。ついで中華人民共和国建国後には、「我々（台湾の人びと）は祖国の懐に帰るのだ」とする北京語の歌詞を与えられた。

また「我愛我的台湾」には、日本語詞も存在する（図1「いとしの故郷台湾」<sup>(5)</sup>）。このように「我愛我的台湾」は、じつに数奇な運命をたどった歌謡であった。以下に「我愛我的台湾」の北京語歌詞と日本語歌詞を示した。ここから分かる通り、「我愛我的台湾」は日本では、中華人民共和国のプロパガンダとしての色彩が強い。台湾の歌でありながら、「新中国」（中華人民共和

国／中国共産党）を支持している人たちの歌となった歌、それが「我愛我的台湾」なのである。

「我愛我的台湾」（楊揚改詩、思遊記譜）

我愛我的台湾啊、台湾是我家鄉。  
過去的日子不自由、如今更苦愁。  
我們要回到祖國的懷抱。  
兄弟們啊、姊妹們、不能再等待。  
兄弟們啊、姊妹們、不能再等待。

故郷から離れた日本で「新中国」の成立を迎えた在日華僑や台湾人たちは、この歌を通してどのようにして新たな政治的アイデンティティを確信していったのであろうか。1949年の中華民国遷台／中華人民共和国建国以降における

図1 『新中国の音楽』（58頁）所収「いとしの故郷台湾」（楽譜のみを抜粋）

いとしの故郷台湾  
我愛我的台湾

原曲 楊揚 改詩 思遊 記譜

誰知狗猪又來、台湾成苦海  
 こいしーいー 台湾ーよ 故郷のふるさと  
 しいたげられよ あされいまもなほ  
 とこくのもとに はせーさんーじ  
 兄ー弟ーはよ はせーくしうてぬ  
 たらあがれ

日本華僑の政治的アイデンティティは強いというならば、在日台湾人なら①中華民国（国民党）支持派、②中華人民共和国（新中国／共産党）支持派、③台湾独立派、④特段政治志向のない者に分類できる。また台湾人を除く中国大陸出身華僑も①、②、④に分類できる。

しかし、それははじめから明確に分岐していたわけではなく、中国と台湾、共産主義と反共といった誰も経験したことのない事態を前に、政治的アイデンティティをめぐる様々な模索が錯綜していたというのが正確なところではないだろうか。

「我愛我的台湾」が中国大陸より伝わった1950年代の日本は、敗戦による日本帝国の崩壊によって、人々の再移動の真只中にあった。1953年から1958年の間、日本人抑留者の引揚船として利用された「興安丸」は、往路において、中華人民共和国に「帰国」する日本在留の華僑や中国人残留留学生たちを載せていた<sup>(6)</sup>。

中華人民共和国へ「帰国」した者のなかには在日台湾人も少なからず含まれていた。在日台湾人は、1948年当時1万3433人を数え、中国大陸出身者1万9715人に匹敵した。そうした一種錯綜した状況の中で、共産主義に期待し、「新中国」との関係を探ろうとしてきた人々も、台湾人のうちの一部に存在したのである<sup>(7)</sup>。何義麟の指摘によれば、この時期、「台湾人華僑（主に戦前から日本に住む台湾人<sup>(8)</sup>——筆者注）」のナショナル・アイデンティティの分岐点となったのは、二・二八事件への歴史認識の違いであり、その認識のいかんによって、台湾独立運動に向かう者もいれば、中華人民共和国に共鳴する者もいた、という<sup>(9)</sup>。

一方、「新中国」に憧れつつも日本に残った華僑たちが、実際の「新中国」を肌身で感じた日本人引揚者との接触を通じて「中国」を実感

し始めたのもこの時代であった。1950年代において、中華人民共和国支持の横浜山手中華学校では、帰国した残留留学生教員に代わって日本人引揚者が教員となり、華僑の子弟らに音楽や美術、あるいは中国語（北京語）といった民族教育の根幹となる科目を受け持っていた。

本稿では、このように日本帝国の崩壊に伴う台湾人を含む日本華僑や満州引揚日本人などの再移動と、共産主義ネットワークを介した「国際的連帯」が交錯するなかで、「我愛我的台湾」が、人々にどのような政治的アイデンティティを喚起しようとしたかを明らかにする。そうすることで、当時の日本華僑社会が、政治的アイデンティティ<sup>(10)</sup>の面でいかに流動的であったかが示される。そして、日本人引揚者及び台湾人といった帝国日本の一翼を担った人々が戦後における日本華僑の政治的アイデンティティの生成に関与した意味を明らかにしようというのである。

本稿で主に使用する資料としては、当該時期に東京華僑総会<sup>(11)</sup>で発行された『東京華僑会報』（1957年に『華僑報』と改題）、1956年10月に刊行された中国音楽研究会編『新中国の音楽』（飯塚書店）のほか、横浜華僑の符順和氏所蔵の個人資料（横浜黄河合唱団に関する記念冊子、横浜山手中華学校『校友会報』、1958年発行の横浜山手中華学校校内誌『校圃』）を参照する。その他、関係者へのインタビューや回想録も使用する。また、用語の煩雑さを避けるため、以降本稿で単に華僑・華僑社会（組織）としている箇所は、原則として在日台湾人（華僑）や残留留学生も含んでいる。

## I 戦後日本の華僑が歌った北京語の歌と政治的アイデンティティの可塑性

### 1. 歌の言語

戦後日本華僑の政治的アイデンティティには言語の問題が深く関わっている。そこでまずここでは、歌が歌われた華僑学校における言語の問題について簡単に触れておきたい。

戦前、華僑学校で教えられた言語は日本各地で統一されていなかったが、戦後の授業再開とともに中国各地の方言(広東語なり上海語が主)から北京語へと一本化された。同時に、旧満州国や汪兆銘政権から派遣されていた北京語話者の残留留学生が教員として華僑学校に関わりを持ち始め、左派と結びつく中国の抗戦歌曲などを学生に教えていた。

それまでの日本華僑の言語は、北京語以外の言語であり、戦後新たに華僑社会と関わりを持った台湾人も北京語ではなく台湾語を母語としていた<sup>(12)</sup>。学校で北京語が導入されたことは、華僑や在日台湾人にとって全く未知のアイデンティティに触れるきっかけを提供するものであった。

学校を中心とした日本華僑社会における北京語の普及は、学校を通じて戦後新たに華僑社会に関わりを持ち始めた残留留学生教員が主体となって、主に戦前から日本に住む非北京語話者の中国大陸出身華僑や台湾人の子弟らを相手に行われた。このように、北京語を母語としない地域の華僑なり台湾人が北京語による「新中国の音楽」<sup>(13)</sup>に触れるきっかけになったのは、華僑学校における言語環境の変化に因るところが大きい。

### 2. 戦後の在日台湾人及び残留留学生と華僑学校の状況

現在、日本の華僑学校は5つある。その内、中華民国系が東京中華学校(1929年創立)、横浜中華学院、大阪中華学校(1946年創立)の3校、横浜山手中華学校と神戸中華同文学校(1899年創立)の2校が中華人民共和国系となっている。今でこそ、各学校の旗幟はある程度明確だが、1950年初頭は表向き日本と国交のある中華民国の国旗を掲げていても、中華民国政府と国民党は、学校内部の左傾化を危惧していた。こうしたことから、内部の旗幟は不鮮明なものであったといえる。

戦後、神戸中華同文学校は授業再開と共に、日本の学校から転入してきた台湾出身者の子弟のために「特別クラス(特別班)」を設け、北京語に特化した教育を行った<sup>(14)</sup>。1950年代に中国大陸へ渡った同校卒業の台湾出身者の多くも、かつて「特別クラス」に通い、学校生活を通して中国大陸出身華僑子弟の学生や留学生教員との親交も深めていた。そしてこの時代、台湾出身者も含めて同校の生徒は残留留学生教員から「新中国の音楽」を教わっていた<sup>(15)</sup>。資料が少ないため、横浜と神戸以外の華僑学校の状況は不明であるが、分裂前の横浜中華学校(1952年以前)では、残留留学生教員が学校の中で「黄河大合唱」や「九・一八」などの、左派と結びつく抗戦歌曲と言った「進歩歌曲」を、華僑学生に教えていた。神戸中華同文学校も同様で、『中国留日同学総会二十年(1946-1966)』にある呂招治(台湾基隆出身、神戸中華同文学校卒、1953年に中国へ渡る)の回想によると、1949年前後、同校の残留留学生教員が「進歩的な解放区の歌曲」を学生に教えていたという。そして彼ら教員と校友生(卒業生)は同校生徒とともに「歌詠隊」などの学外サークルを

組織し、同文学校の音楽教室を拠点にして、「黄河大合唱」、「義勇軍進行曲」、「団結就是力量」、「歌唱祖国」などのほか、「インターナショナル」などを歌ったという(図2)<sup>(16)</sup>

このような中で、中華民国政府や国民党は華僑学校の左傾化を危惧したのである。1952年にはまず横浜中華学校において残留留学生教員を解雇した上で、新たな校長を派遣して学校を接収した(これを、「学校事件」という)。そうして新校長(国民党)側と残留留学生教員(共産党)側を支持する者とが対立し、その結果、横浜中華学校は横浜中華中学(1969年に横浜中華学院に改称)と横浜山手中華学校(1957年に改称)に分裂した。

とりわけ、既存の校舎を「追い出された」と見る横浜山手中華学校側は、校舎を国民党より奪還すべく様々な活動を行ってきた。「新中国の音楽」は、中華人民共和国の祝祭日を記念する行事のみならず、校舎の奪還を見据えた決起集会や学校事件を振り返る場面などで度々歌われてきた。ともあれ重要なことは、「我愛我的台湾」は、台湾を実際に統治する中華民国系の学校ではなく、それを「奪還(解放)」せんとする中華人民共和国系の学校の生徒らが歌ったことである。

図2 1951年の神戸中華同文学校の音楽会(神戸華僑歴史博物館所蔵)



### 3. それぞれが歌わない各自の「祖国」の歌

ここで、比較のため中華民国系の組織で歌われた歌がどうであったか振り返ってみよう。

中華民国系の横浜中華学院が創立100周年を記念して、1999年に作成したCDアルバムには「梅花」(劉家昌作詞・作曲、1975年)や「中華民国頌」(劉家昌作詞・作曲、1978年)をはじめ、1970年代の台湾でよく歌われた歌が多数収録されている<sup>(17)</sup>。なかでも「中華民国頌」で象徴されている世界は、中華民国が実効支配する台湾ではなく、中華民国が失った中国大陆である。今日の台湾では歌われる場面こそ少ないが、中華民国を支持する海外華僑や中国国民党海外党部の集会で今もよく歌われている点も興味深い<sup>(18)</sup>。

戦後に台湾で作られた北京語の音楽でも政治色の弱いものは中華人民共和国を支持する華僑学校や華僑団体でも歌われることもあるが、当然「梅花」や「中華民国頌」は歌われておらず、むしろ教わる機会も無いためその存在すら知られにくい<sup>(19)</sup>。他方、横浜山手中華学校は現在、チャイムに「東方紅」のワンフレーズを採用している。さらに、同校の校友生有志による音楽研究会が主催した音楽祭のアンコールでは「団結就是力量」が全員で歌われ、神戸中華同文学校の創立115周年祝賀会でも全員で同曲が合唱された<sup>(20)</sup>。逆に中華民国系の華僑学校や華僑団体が同曲が歌われるかといえば、それも無い。

「中華民国頌」や「梅花」が中華民国側の陣営に伝わったのは、中華民国の国連脱退と日華断交、そして米華断交などが続いた1970年代以降であった。一方の「我愛我的台湾」が中華人民共和国側の陣営でよく歌われたのは、日中国交正常化前の特に1950年代から1960年代である。これらの歌は、華僑の居住国たる日本が、

華僑自身の「祖国（中華民国／中華人民共和国）」あるいは「故郷（台湾／大陸）」と政治外交的な往来が絶たれた（絶たれている）ときに広まった。それぞれの歌詞には失った中国の国土／帰れない故郷台湾が織り込まれていたが、この点は歌が持つ喚起力が極めて重層的であることを示している。

北京語の歌は戦後の華僑学校でも広く歌われ、時として各々の政府の宣伝の歌も浸透した。だが、それは歌と歌詞が華僑に伝わることで変化しうる彼らの政治的アイデンティティ、いわばその可塑性を前提としたものであったといえよう。

## II 台湾から中国大陆、そして日本へ——「我愛我的台湾」の伝播過程

「我愛我的台湾」が特によく歌われたのは、中華人民共和国支持の華僑団体が主催する二・二八事件の記念行事においてであった。国民党の台湾統治に反対する中華人民共和国支持の団体にとって、国民党が台湾住民への弾圧を開始した二・二八事件を記念する集会は、弾圧者である蒋介石を非難し、自らの理念を強く訴える機会であった。つまり、この歌は「反国民党」を強調する文脈の中で歌われたのである。本節では、「我愛我的台湾」の伝播と改変過程を辿り、日本華僑に対する「新中国」の宣伝には、日本人引揚者及び台湾人がその一翼を担っていたことを明らかにする。

### 1. 改編された「新台湾建設歌」

先に述べたように「我愛我的台湾」の詞は中国大陆で付けられた。蔡添進によると、中国大陆で二・二八事件に対する憤りが渦巻く中、泉州の音楽教師である潘玉仁という人物が「南都

之夜」（つまり、「新台湾建設歌」）に新たな歌詞を付け、「台湾謡」として改編した。その「台湾謡」が最終的に「我愛我的台湾」となるのは、1954年のことである。その事の成り行きは次のように整理される。

同年7月17日に潘玉仁が「台湾謡」改め「我愛我的台湾」としたものを『廈門日報』宛に送り、同年10月上旬頃の『廈門日報』文化生活版で、「我愛我的台湾」の歌詞が掲載された。このとき潘玉仁の名はなく、改詞者楊揚<sup>(21)</sup>の名前しか見られなかった、とある。さらに興味深いのは、この時点で歌詞の「我們要回到祖國的懷抱」の部分は、「誰知狗豬又來，台湾成苦海」であったという。ただ蔡添進の論考では、歌詞がいつごろ変えられたのかまでは明らかにされていない<sup>(22)</sup>。

いずれにせよ日本に伝わったのは「我們要回到祖國的懷抱」とされたものである。次に、この歌を日本で歌った者たち、そしてこの歌が響いた場面について見ていこう。

### 2. 「我愛我的台湾」を日本で歌った者たちと響いた場面

図3は、1957年2月10日の『東京華僑会報』に掲載された、「二・二八起義十週年記念会」（2月24日開催）の告知である。当日は「記念講演」のほかに、音楽劇「切り崩せぬ阿里山」や中国映画『秦香蓮』が上映された。「切り崩せぬ阿里山」は、青山梓（1908-1971）の指導する「横浜黄河合唱団」（黄河合唱団ともいう）と中国音楽研究会による自作の音楽劇である。なお、青山は横浜山中中華学校の教員も務めていた。この日に演じられた演劇「切り崩せぬ阿里山」の様子を『東京華僑会報』の記事をもとに振り返ることは、二・二八事件がどのような文脈で語られたかを明らかにする上でも、必要な作業と

図3 『東京華僑会報』掲載の告知（1957年2月10日）

## 二・二八起義十週年記念會

二・二八起義十週年を記念するため、東京華僑青年會では連日準備中で、記念會を委員會を設け、同委員會で記念會の準備を進めてきたが、おぼと二・二八起義十週年記念會を二月二十四日（日）午後一時から五時まで、國鉄労働會館（東京駅八重洲口）で開催することにした。記念會の内容は次の通り。

**2月24日（日）午後一時—五時**  
**國鉄労働會館で舉行**

—◇節 目◇—

1. 開會之辭
2. 歌
3. 紀念劇
4. 會場雜詠（日本代表團）——旅日華僑青年會
5. 國歌（日本代表團）——旅日華僑青年會

なる。

「切り崩せぬ阿里山」は、「台湾には大昔二つの太陽があった……」という台湾に伝わる昔話が前置きとなって幕が開く。後に、それぞれの太陽は一つになって、人々は幸福な生活を送るというが、この劇では太陽が一つになるまでの台湾の人々の「大きな幸せを得るための、長い間にわたる困難と苦闘」の過程というものを描いている。そしてストーリー本編は、抗日戦争やヤンコ踊りから始まる。米軍と国民党、及び日本軍部による「裏面工作」の様子をパントマイムで演じるなどして、観衆に「アメリカの植民地政策と国民党の腐敗ぶりをまざまざと見せた」という。続いて、農民に扮した若い男女の対唱、二・二八事件に関する朗読があった。劇の終盤では、出演している横浜山手中華学校の生徒が「我們一定要解放台湾」<sup>(23)</sup>と題する歌を歌い、時代は中華人民共和国の誕生まで一気に進み、幕を閉じる。

劇中では「我們一定要解放台湾」のほか、「我愛我的台湾」の独唱もあった。このことに関し

記事のなかでは、「『我愛我的台湾啊……』の独唱は、ふるさと台湾を愛する僑胞たちの胸に強く強く響いたことであろう。この平和な心からの願いを妨げているものは誰だろうか？」と触れられ、国民党への批判を暗に示している。

以上のように『東京華僑会報』には、中華人民共和国を支持する意図をもって書かれた記事ではあるが、当日の演劇をめぐる観衆の様子が伝えられていた<sup>(24)</sup>。この他、管見の限りでは、『東京華僑会報』で「我愛我的台湾」について触れられた記事は、「切り崩せぬ阿里山」（1957年2月24日公演）の内容を伝えた1957年3月11日付の第60号が最初である。だが、1956年6月10日には横浜山手中華学校の中学2年生の学生が、6・1国際児童節（中華人民共和国の祝日）を記念する「国際児童節遊芸大会」において、「我愛我的台湾」を合唱していた。おそらく1956年6月の「国際児童節遊芸大会」が、日本における「我愛我的台湾」の初舞台でもあった<sup>(25)</sup>。そして表1で示したように、東京や神戸で開催された「二・二八起義記念会」でもこの歌が歌われた。時期はやや下るが、旅日華僑青年聯誼会の機関紙『東風』第8号（1963年8月発行）にも「我愛我的台湾」の歌詞が掲載され、聯誼会活動に関わる華僑青年たちにその歌唱が推奨された<sup>(26)</sup>。

二・二八事件を契機に、中国で「我愛我的台湾」へと改編されるに至った台湾の歌は、国民党の台湾統治及び日本と中華民国の政治外交関係を要因として、一つは「ふるさと」への「平和な心からの願い」が妨げられていると考える在日台湾人及び華僑の集会で、そしてもう一つは学校が分裂したという記憶を持つ横浜山手中華学校の生徒の間で、歌われた歌であった。このように、ある時代における「台湾」ないし「ふるさと」への認識が、彼らの政治的アイデンティ

表1 1956年から1963年にかけて「我愛我的台湾」が歌われた場面

日時	主催団体	集会名	歌唱者	場所
1956年6月10日	横浜山手中華学校	国際児童節遊芸大会	横浜山手中華学校 中学2年生	国際文化会館
1957年2月10日	東京華僑総会	二・二八起義十週年 記念会	横浜黄河合唱団/ 中音研合唱団	国鉄労働会館
1957年6月2日	横浜山手中華学校	国際児童節遊芸大会	横浜山手中華学校 小学4年生	元街小学校講堂
1958年2月28日	東京華僑総会	台湾二・二八起義 記念会	横浜黄河合唱団/ 東京華僑青年	千代田公会堂
1959年2月28日	東京華僑総会	二・二八起義十二週年 記念会	東京華僑青年聯誼会	千代田公会堂
1959年2月28日	「二・二八」記念大会 神戸華僑実行委員会	神戸「二・二八」記念 大会	在神華僑の若い青年 男女	神戸中華青年会館
1963年2月28日	不明	神戸「二・二八」記念 大会	神戸華僑婦人会	神戸中華青年会館

出所 「国際児童節遊芸大会節目単」〔校圃〕横浜山手中華学校、1958年、49頁及び1956年から1963年に東京華僑総会が発行した『東京華僑会報』『華僑報』を参考に筆者作成。

ティを強く規定したといえる。

### 3. 「我愛我的台湾」と日本人引揚者

次に「我愛我的台湾」が、いつ、誰を介して日本華僑に伝わったのかを考えてみたい。中国音楽研究会編『新中国の音楽』（飯塚書店、1956年）は、それらを考える上で手掛かりとなる。

『新中国の音楽』は楽譜つきの曲集に加え、二部の本文から構成されている。同書の「あとがき」によると、本文の第一部「新中国への道」は村松一弥<sup>(27)</sup>、第二部「新中国の音楽活動」は青山梓、第二部の中盤と「出版について（レコードを含む）」の項目は小沢玲子（日中友好協会初代事務局長小沢正元の娘）が執筆したといい、収録されている楽譜は、すべて中国の音楽出版社と新音楽出版社のものに基づいている。同書によれば、中国音楽家協会が刊行のための「沢山の資料」を、1956年5月に訪日した梅蘭芳率いる文化使節団に託したという。

先述の通り「我愛我的台湾」の歌詞がその形となったのは1954年と言われている。この

歌に関して『新中国の音楽』では、「台湾の民謡として多くの人に親しまれた抒情歌を思遊が整理し、楊揚が新しい歌詞を配したもの。1955年2月号の『歌曲』に“福建歌曲集”から転載された。」との解説がされている<sup>(28)</sup>。ここで「台湾民謡」と記されていたことについて、この歌に日本語詞を付した劉俊南は「戦前から台湾にあった歌で、幼いころから聞いていた」と述べていた。「戦前」というのは劉の記憶違いであったが、「新台湾建設歌」ないし「南都之夜」の旋律は台湾で聞き慣れたものであったことに間違いないだろう。

なお、梅蘭芳らに託された「沢山の資料」のなかに、含まれていたものか定かではないが、筆者は1955年6月に修訂された音楽出版社出版〔北京〕の中央音楽学院民族音楽研究所編『中国革命民歌選』において、「我愛我的台湾」が「新中国成立以後」の各地の「民歌」として掲載されているのを確認した<sup>(29)</sup>。

このように「新台湾建設歌」は、二・二八事件を契機として中国に伝わり「台湾謡」から「我

愛我的台湾」と二度の改編がなされた。そして二・二八事件から10年近くが経過、この歌は『新中国の音楽』に掲載された。ここでは歌詞が「我們要回到祖國的懷抱」となっていた事に加え、その歌い方として、同書58頁下段には「やや緩く、うったえるように、そして中国全國民の激しい怒りの気持と、台湾解放への熱情を強く表すように歌う」と記されて日本に伝わったのである。

以上見てきた『新中国の音楽』の出版事情から考えれば、「我愛我的台湾」が日本華僑に広まった経緯はおそらく次の通りである。1956年5月の梅蘭芳訪日以降、「我愛我的台湾」の楽譜を入手した青山梓が、横浜山手中華学校の生徒に合唱させる音楽教材として取り込んだ。そして、その初公演が、1956年6月の「国際児童節遊芸大会」となったのではないかと考えられる。また、先述した劇、「切り崩せぬ阿里山」に横浜山手中華学校の学生が出演し、劇中歌として「我愛我的台湾」を歌ったことから鑑みても、引揚者の青山は「我愛我的台湾」を日本華僑に広めるきっかけを担った人物であることに違いないだろう。

### III 「我愛我的台湾」を伝えた者たちから見える日中台の「国際的連帯」

これまでに見てきたように、許石作曲の「新台湾建設歌」は二・二八事件を契機として中国大陸で「台湾解放」のプロパガンダとなる音楽「我愛我的台湾」へと作り変えられた。そして「我愛我的台湾」は日本へと伝わったのち、日本人引揚者青山梓の手を介して横浜山手中華学校の生徒によって歌われ、劉俊南が日本語詞を付した。そして、北京語のものは中華人民共和国支持派による二・二八事件記念集会の場でよ

く歌われた。

劉俊南は、青山梓とともに「はるかにはなれた、そのまたむこう」から始まる「草原情歌」<sup>(30)</sup>の日本語作詞者として知られているほか、師哲・李海文『毛沢東側近回想録』（新潮社、1995）や金冲及主編『周恩来伝1949-1976』（岩波書店、2000）の日本語訳を行った人物である。筆者は2015年8月1日と同年11月3日の計2回に渡り、横浜市内において劉へのインタビューを行った。本節では、劉へのインタビューと関連資料をもとに、華僑社会に新たに加わった台湾人の存在、そして中国大陸帰国希望華僑（含台湾出身者）の流出と日本人引揚者の流入、という戦後日本華僑社会の変化から垣間見える日中台の「国際的連帯」について考えていく。

#### 1. 台湾から日本へ、劉俊南の音楽体験

劉俊南は日本統治下の台南州で生まれた。1950年5月に来日し、その建国まもなくより中華人民共和国を支持した在日台湾人である。中国留日同学総会副主席（1954年）、東京華僑総会副会長（1996-2000年）、留日台湾省民会常務理事などを歴任し、2016年11月に急逝するまで、全日本華僑華人中国平和統一促進会（2005-2016年）の副会長職にあったことは、劉が中華人民共和国を支持する在日台湾人の陣営にいた証左となろう。

劉は台湾在住時代から音楽に関心があったといい、高校時代に嘉義・大林で台湾各地を回っていた大学生たちより「義勇軍進行曲などを教わっていた」とも話していた。3回目のインタビューを行う前に、劉が急逝してしまったため、この大学生たちと具体的にどのような親交があったのか、とうとう伺うことは出来なかった。ただ劉が話していた「大学生たち」は、おそらく国立台湾大学の学生有志による「麦浪

歌詠隊」であろうと推察できる。「麦浪歌詠隊」は、台湾全土を回り「義勇軍進行曲」や「黄河大合唱」、「団結就是力量」など日中戦争時代の抗日左翼音楽を歌い広めていた。劉が嘉義で出会ったのは、おそらく「麦浪歌詠隊」と思われる。その「麦浪歌詠隊」のメンバーは、1949年4月6日に国民党当局に逮捕され、解散を余儀なくされた。この事件は、四・六事件と言われている<sup>(31)</sup>。

劉は、日本にきた理由を「国民党が嫌で台湾から逃げてきたから」と筆者に語ってくれた。1950年代の在日「中国人」社会における「新中国」の支持層の多くが、戦前・戦中期に満州から派遣された中国人学生や、戦前に来日した台湾人であったなか、劉が1950年に来日したという点は特筆すべきものがある。

1950年9月に中央大学経済学部へと編入学した劉は、1951年に落成したばかりの「音楽センター会館」に通い、うたごえ運動の創始者関鑑子のもとでロシア民謡を習っていたという。それが縁となって劉は中央合唱団に関わり、1952年には東京家政大学で開催された「日本音楽会」に参加し、ソリストとして中国の歌を歌ったと、振り返っていた。

また劉は、「音楽センター会館」での活動の他にも、ほぼ同時期に坂井照子のもとで中国の革命歌を日本華僑や日本人に広めるアルバイトをしていた。坂井照子は「町から村から工場から」（国鉄詩人編集部作詞）の作曲者で、中国で敗戦を迎えた詩人坂井徳三（1901-1973）の妻である。劉の記憶によれば、坂井照子は東京中華学校を拠点に華僑向けの音楽教室を開催していたという。そこでは、劉のほかに台湾・嘉義出身の呂水深が坂井照子のもとで音楽の手伝いをしていたという。呂は戦後まもなくより楊春松<sup>(32)</sup>ら東京在住の台湾人日本共産党員とも親

交があった<sup>(33)</sup>。

劉によると、呂水深は後楽寮<sup>(34)</sup>の寮生による合唱団「音痴コーラス」を創設者の林連徳（1923-2009）<sup>(35)</sup>より引き継ぎ東ねていたという。その劉も後楽寮に住み<sup>(36)</sup>、「音痴コーラス」のメンバーであった。郭承敏の回想録<sup>(37)</sup>によれば、林連徳は1950年11月に日本共産党に入党し、月日は不明だが1952年に中国へ渡っている。一方の呂は同年9月に中国に渡っている。以上の点を鑑みると、呂が「音痴コーラス」を引き継いでいたのは、ほんの数か月の間だと思われる。

## 2. 中国音楽研究会の結成

詳しい時期は明らかではないが、劉俊南は小沢玲子より、「中国の音楽を広めよう」との誘いを受けたといい、そのことが契機となって小沢と共に中国音楽研究会（以下、中音研）を1952年に結成したという。

中音研について韓慶愈の回想録のなかで、少し述べている箇所があった。少々長いが引用する<sup>(38)</sup>。

中央合唱団は、関鑑子が創立した合唱団で日本共産党の青年組織、日本共産青年同盟（日本民主青年同盟の前身）の音楽部門として結成されていた。その合唱団が後楽寮に教えに来るようにもなった。勇ましい歌もあり、叙情の歌がありと多彩だった。中国の歌が好きな日本の若者も一緒に合唱するようになり、それが「中国音楽研究会」に発展し、一九五六年には『新中国の音楽』を刊行している。

劉によれば、結成当初の中音研は合唱団（その名を、中国音楽研究会合唱団という）としての

活動を主としていたといい、そのメンバー全員が日本共産党員だったという<sup>(39)</sup>。また呂水深の「帰国」後、活動が下火になっていた「音痴コーラス」を中音研合唱団と結びつけるなどして、中音研メンバーを増やしたようだ。劉も日本共産党員であったのか核心の部分に触れることは出来なかったが、後楽寮という場所や、1950年代初頭、在日台湾人や残留留学生のなかに日本共産党員が多かったことも背景として手伝い、劉と小沢玲子が音楽を通じて関わる機会が生まれたと考えられる。

「草原情歌」のもう一人の日本語作詞者青山梓は、これまでに幾度と述べてきた横浜黄河合唱団と横浜山手中華学校で音楽の指導に当たった人物である。劉によると、青山は1953年に旧満州国より引揚げた日本人で、かつて新京交響楽団に在籍していた。結成まもなくの中音研合唱団には、「プロ」の音楽家がいなかった。そのため、劉はどこからか青山の日本引揚げと音楽背景を聞くと、すぐさま青山を中音研合唱団に引き入れたという。

中音研は1959年頃まで事務局を、日中友好協会が入居する千代田区西神田の東方学会ビルの一室に構えていた。さらに、合唱会といった活動情報も日本共産党の機関紙『アカハタ』の「文化短信」欄に掲載されており、日本の社会主義勢力との結びつきが強かったことが窺える。結成から10年目の1962年、中音研は「合唱団燎原」（事務局も小沢宅に移転）と改称して再スタートを切るが、以降の活動に関し詳細は分かっていない<sup>(40)</sup>。

このように「中国音楽研究会」としての活動は僅か10年であった。そしてその活動は、先に述べたように、1957年2月の「二・二八起義十週年記念会」で中音研メンバーは横浜黄河合唱団とともに「切り崩せぬ阿里山」を演じる

など、とりわけ「新中国」支持の華僑らとの交流を深めた。

### 3. 留学生から日本人引揚者へ、「祖国」を伝える者の変化

これまでに見てきたことから分かるように、中音研の組織は、呂水深らこれまで「新中国」の音楽を広めていた人物が中国へと渡り、活動が下火になっていたときに劉が関わったことで拡充された。

また、中音研が成立した1950年代前半は、主に戦前から来日している華僑らの子弟に中国語や音楽を教えていた横浜山手中華学校の残留留学生教員が、次々に中国へ帰国した時期でもあった。そして、帰国した教員に代わって日本人引揚者が教員となって、学生たちに「新中国」の音楽など教えたのである。その大まかな経緯には、個人レベルではあるものの中音研を通じた劉俊南と青山梓という、帝国日本の崩壊によって移動を強いられた台湾人や日本人引揚者の交流があった。ここでは、その概況を振り返ると共に、中華人民共和国支持の華僑団体——主に横浜山手中華学校を舞台として、華僑と日本人引揚者及び台湾人の連関があった意味を考える。

劉俊南によると、残留留学生教員を経て横浜山手中華学校の校長となった烏勒吉<sup>(41)</sup>は劉と同じ後楽寮に住み、劉によく学校の話を開かせていたという<sup>(42)</sup>。当該時期の横浜山手中華学校では、残留留学生教員の多くが中国に帰国し、さらに音楽教員も不足していた。このような事情と関係も相まって、烏勒吉は劉俊南を介して青山梓を知り、同校に呼んだ。横浜山手中華学校の記録によれば、青山は1954年から1957年まで教員として在籍した<sup>(43)</sup>。

青山が学校と共に音楽を通じて華僑と関わり

を持つに至った組織である「黄河合唱団」<sup>(44)</sup>は、1952年に結成された横浜中華学校校友会合唱班が前身となっている。青山がいつから「黄河合唱団」を指導し始めたのか、そしてその頃の合唱団とその周辺に関わりがどのようなものだったのか、「黄河合唱団」結成10周年を記念して1962年に刊行された記念誌『黄河』では、次のように振り返っている<sup>(45)</sup>。

1953年8月指導者に、中国から引き揚げて来られた青山梓先生を迎える。練習場は青年会館にうつり、後に現在の婦女会館におちついた。これにより本格的な新中国の力強い歌曲を練習。団は再組織され、会員制による団の強化、練習内容の充実、幹部会、学習会の設置等、団もより充実、発展の路をたどる。

国民党反動派に対する闘争の先鋒になり、華僑集会には力強い民族の歌声をひびかせた。これらの華僑への情宣はもとより、日中文化交流の面として「海の平和祭典」「神奈川のうたごえ」「日本のうたごえ」の定期出演を初めとする色々な「うたごえ」運動に参加、同時に中朝の友好親善にも力をいれる。

横浜山手中華学校卒業生を中心とした「横浜中華学校校友会」の『横浜中華学校校友会六十年記念誌』によると、1950-60年代の校友会は、「黄河合唱団」に代表される文化活動<sup>(46)</sup>のほか、「国民党反動派」に対する闘争<sup>(47)</sup>、「入管法反対闘争」<sup>(48)</sup>、「善隣会館闘争」<sup>(49)</sup>など闘争の先頭に立っていた<sup>(50)</sup>。その他、校友会は華僑青年同士の交流を目的とした華僑青年聯歡節にも参加し、聯歡節でも合唱がよく行われていた。

1962年には黄河合唱団が「日本のうたごえ祭典10周年」に出演し、翌年も「うたごえ」

に参加している<sup>(51)</sup>。このように校友会活動の場では常に歌声が響いていた。その中で、「新中国の音楽」を指導する人の中に青山梓など旧満州国からの引揚日本人がいた点は、日本帝国の崩壊による人々の再移動が結びつけた「国際的連帯」の象徴と言えよう。

青山梓の他にも、中音研に関わる日本人で横浜山手中華学校の教員になった人物に江田澄（在職1957-1961）と岸良辰巳（在職1954-1969）<sup>(52)</sup>がいる。いずれも中華人民共和国建国後の引揚者であった<sup>(53)</sup>。中音研メンバーではないが、細川廓真（在職1952-1980）も横浜山手中華学校の教員で日本語の授業を担当していた。詳しい引揚げの時期は目下不明だが、細川も戦前の大連に在留した経験がある。そして、1958年『校圃』所収の「随想」において、横浜の二つの学校の現状に「将来は必ず統一さるべきもの」との考えを示し、同校で教員を務めていることに関しては「私は国際的連帯というあつい友情のなかに抱かれて、中華民族の民族教育の一端になうことのできる光栄を片時も忘れたことはない」と述べている<sup>(54)</sup>。今のところ青山梓の回想録などを見つけないに至っていないが、青山同様に中国大陸在住・引揚経験を持つ日本人教員は、何らかの個別の立場を持ち、閉ざされていた日本-中国大陸の仲を取り持とうと考えていたのであろう<sup>(55)</sup>。

## おわりに

本稿では、台湾の歌でありながら、「新中国」を支持した人たちに歌われた「我愛我的台湾」を手がかりとして、戦後日本において華僑が「新中国」をイメージし、それにまつわる政治的アイデンティティを獲得する過程には、中国音

楽研究会や横浜山手中華学校に関わった日本人引揚者及び台湾人などといった帝国日本の一翼を担った人たちが関与してきたことを明らかにした。「我愛我的台湾」からは、中国と台湾、共産主義と反共といった誰も経験したことのない事態を前にした日本華僑社会の様々な変化が凝縮されて見える。

現在、日本における華僑学校は5校あり、うち3校が中華民国派であることから、中華民国派が主流を占めているようにみえる。そのため本稿の事例はごく限られたものにしか過ぎないという批判もあり得よう。しかし本稿で述べてきたように、政治的アイデンティティの可塑性及び歌と歌詞の持つ喚起力を考慮するとそうした表向きのレッテルの背後に実に様々な人びとの政治的アイデンティティをめぐる戸惑いや不安ないし希望があることが分かる。

本稿では主に横浜と神戸の華僑学校に限っているが、戦後日本の華僑学校において非北京語話者の日本華僑相手に北京語教育の担い手となったのは、旧満州国や汪兆銘政権時代に日本に派遣されてきた残留留学生たちである。特に横浜と神戸の華僑学校では、残留留学生教員のなかには左傾化し、授業や課外活動を通じて「新中国」の革命歌や歴史観などを学生に教える者がいた。学校の左傾化を危惧した中華民国駐日代表団は、まず横浜中華学校に新たな校長と教員数名を台湾より派遣し、学校を接管した。残留留学生教員側は、これを認めず山手町に臨時校舎を設け（現、横浜山手中華学校）、中華民国側の学校（現、横浜中華学院）と対峙した。

臨時校舎側について一部の留学生教員のなかには「新中国」建設のため、中国大陸へ帰国する者が相次いだ。そこで、教員として入れ替わるようになってきたのが「中国経験」のある満州引揚日本人らである。日本人引揚者と華僑の

関係は意外にも注意が払われてこなかったが、「新中国」に憧れつつも日本に残った華僑たちは、実際の「新中国」を肌身で感じた日本人引揚者との接触を通じて「新中国」を実感し始めたのである。

とくに台湾人劉俊南と日本人引揚者青山梓の手を介して広められ、反国民党の文脈で歌われた「我愛我的台湾」は、一つは台湾との往来が国民党によって妨げられていると考える在日台湾人及び華僑の集会で、そしてもう一つは国民党によって学校が分裂したという記憶を持つ横浜山手中華学校の生徒の間で歌われた。このように、ある時代における渾然一体とした台湾認識が、「新中国」支持華僑の政治的アイデンティティを強く規定した。「我愛我的台湾」はいまなら不思議に思われる「台湾」、そして「帝国日本」と「新中国」という三者を結びつけ、ともすれば越境を許さないように思われがちな政治的アイデンティティを揺るがす可能性を持っていたと指摘できる。

「Rising Sun」と謳われた帝国日本の陽が沈んだ後、旧日本帝国勢力圏内の人びとは再び移動を強いられた。戦後日本の華僑社会における、「新中国」にまつわるイメージとその政治的アイデンティティは、帝国日本の拡大と崩壊によって移動を強いられた台湾人や日本人引揚者が入り交じりながら生成されたのである。横浜山手中華学校に通う華僑子弟が日本人引揚者を介して「新中国」の音楽として「台湾」の歌——「我愛我的台湾」と出会い、合唱したことは、まさに帝国日本の残照といえよう。

## 謝辞

本稿の一部は、科研・基盤研究（A）25244027「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」（研究代表者：貴志俊

彦)の助成によるものである。

なお、本稿を執筆するにあたり大阪大学宮原曉教授にはご指導と多くの示唆を頂いた。並びに大阪大学林初梅准教授、早稲田大学助手鶴園裕基氏にも有益なご助言を戴いた。ここに記して感謝申し上げます。

また本稿は「日本現代中国学会 2016 年度関西西部会大会」(2016 年 6 月 4 日、龍谷大学)での報告を大幅に加筆したものである。その際、関西学院大学西村正男教授には大変有益なコメントをして頂いた。ここに記して感謝申し上げます。そして、2016 年 11 月に急逝された故・劉俊南氏には特にお世話になった。ここに感謝と哀悼の意を捧げます。

#### 注)

- (1) 許石 (1919 - 1980) は台湾を代表する作曲家で、「安平追想曲」、「南都之夜」などの代表曲がある。
- (2) 黄裕元『歌唱王国的崛起——戦後台語流行歌曲研究、1945-1971. I』〔高雄〕、高雄市立歴史博物館、2016 年、3 頁。「新台湾建設歌」の楽譜と歌詞は 2016 年に発見された。許石と「新台湾建設歌」に関しては国立台湾歴史博物館副研究員黄裕元氏と東呉大学社会学系教授石計生氏より多くの教示を受けた。ここに記して感謝申し上げます。「新台湾建設歌」には数々の異名同曲があり、なかでも有名なのは「南都之夜」と、1959 年に葛蘭が香港製作の映画『空中小姐』の劇中歌として歌った「台湾小調」である。
- (3) 許朝欽『五線譜上の許石』〔新北〕、華風文化事業有限公司、2015 年、90 頁。
- (4) 今日の台湾では、「二・二八事件」は外省人 (政府) による本省人 (台湾人) への弾圧の象徴として記憶され、後の台湾社会における「台湾人」アイデンティティの誕生に影響を与えた。
- (5) 「いとしの故郷・台湾」がどの程度人々に歌われたのか、目下不明である。
- (6) 大里浩秋・孫安石編『近現代中国人日本留学生の諸相——「管理」と「交流」を中心に』御茶の水書房、2015 年。王雪萍編著『戦後日中関係と廖承志中国の知日派と対日政策』慶應義塾大学出版会、2013 年などが詳しい。
- (7) この点には陳來幸が多くの研究成果を発表している。陳來幸「戦後日本における華僑社会の再建と構造変化——台湾人の台頭と錯綜する東アジアの政治的帰属意識」(小林道彦・中西寛編『歴史の極柁を超えて——20 世紀日中関係への新視点』、千倉書房、2010 年)。陳來幸「在日台湾人と戦後日本における華僑社会の左傾化現象」(陳來幸・北波道子・岡野翔太編『交錯する台湾認識——国家と文化のはざま』、勉誠出版、2016 年) など。彼らのなかには、中国での紆余曲折を経て再び日本に戻ってきた者もいた。
- (8) 中華民国の基盤が台湾で安定した後に、中華民国のパスポートを持って来日した者とその子孫とは異なる。
- (9) 何義麟「戦後日本における台湾人華僑の苦悩——国籍問題とそのアイデンティティの変容を中心として」『大原社会問題研究所雑誌』679 号、2015 年、31 頁。
- (10) 戴国輝は華僑のアイデンティティを語る上で、社会的・文化的アイデンティティと政治的アイデンティティを分けて考える必要があると述べている。戴国輝『華僑——「落葉帰根」から「落地生根」への苦悶と矛盾』研文出版、1980 年、5-13 頁。
- (11) 東京において、これとは別の中華民国を支持する華僑総会に「中華民国留日東京華僑総会」がある。日本各地には中華人民共和国を支持する華僑総会と、中華民国を支持する華僑総会があり、各々の構成員は大陸出身か台湾出身かで分けられていない。本文で言及する東京華僑総会は、断りの無い限り中華人民共和国系の「東京華僑総会」である。
- (12) 「在日中国人」の人口の多い東京・神奈川 (横浜)・兵庫 (神戸) のなかでも東京と神戸は戦後、台湾人が当地の華僑社会において主流派となっていた。だが、横浜では台湾人の数は多くなく、広東・浙江出身者が多い。2011 年まで、法務省発行の『在留外国人統計』には台湾人も「中国人」として組み込まれていた。留学生や台湾人なども含むため、「華僑」という言葉が適切な表現とはならない。単純に「中国人」と一括りにすることも、台湾の置かれた特殊な状況が見えにくくなる。適切な表現がないため、「」で括った。
- (13) ここで厳密な定義は行わないが、ひとまず左翼と結びつく抗戦歌曲や中華人民共和国建国後に同国で良く歌われた革命歌としておく。
- (14) 中華会館編『落地生根——神戸華僑と神阪中華会館の百年 (増訂版)』研文出版、2013 年、244、252 頁。1899 年創立の神戸華僑同文学校を前身とする神戸中華同文学校は、1939 年に華僑同文 (広東語教育) と神阪中華公学 (北京語教育) が合併して誕生した。合併後、同文学校では北京語教育に一歩化された。
- (15) こうした神戸中華同文学校の状況に際し、日本にいた国民党工作員は同校の左傾化を本国に宛てて報告し、国民党陣営の宣伝強化の必要性を建議した。

- 中華民国が華僑新聞の発行や宣伝映画フィルムの配布など宣伝活動に本腰を上げるのは、1950年代中頃以降である。この点は別稿で詳しく論じる。
- (16) 黄偉初・張岩松「百年校史」横浜山手中華学校百年校誌編輯委員会編『学校法人横浜山手中華学園横浜山手中華学校百年校誌』学校法人横浜山手中華学園、2005年、100-101頁。「回憶母校和投奔祖国的日子」『中国留日同学總會二十年（1946-1966）』〔北京〕、北京日本帰僑聯誼会、2015年、81-87頁。
- (17) CDには制作年が記されていないため、王良主編『横浜中華学院百週年院慶紀念特刊』、横浜中華学院、2000年、434頁所収の「召開『愛唱國語歌曲百曲集』委員懇談会」を参照した。CDには、テレサ・テンの代表曲「小城故事」のほか「龍的传人」「高山青」「何日君再来」など12曲が収録されている。
- (18) 例えば、2015年10月4日に中華民国留日東京華僑總會が主催した「東京華僑總會四十節祝賀公演」（於東京中華学校）では、閉会式の大合唱で「中華民国頌」が歌われた。また、同年11月1日に横浜で開催された「日本地区僑界各界支持国民党2016總統暨立法院選挙後援会成立大会」では「中華民国頌」「梅花」「国家」などの中華民国の愛国ソングのほか、台湾語の「愛拼才會贏」が歌われた。
- (19) 筆者は2000年代に神戸中華同文学校を卒業したが、「歌唱祖国」や「團結就是力量」は音楽の授業で学んだことがある。ただ、同校で「梅花」や「中華民国頌」習ったことはない。
- (20) 2014年11月18日に横浜山手中華学校校友生音楽研究会が主催した「第17回校友生音楽会」（於：神奈川県民ホール。後援：中華人民共和国駐日本国大使館、東華教育文化交流財団）。一方、「神戸中華同文学校建校115周年慶祝晩会」は2014年5月17日に開催された。
- (21) 楊揚と潘玉仁が同一人物であるか、詳しいことは分かっていない。
- (22) 蔡添福「許石<南都之夜>伝唱及旋律来源探究」『高雄文化研究2009年年刊』正修科技大学通識教育中心、2009年、17-18頁。
- (23) 1954年に中国で作られた劉冰作詞、劉福安作曲の楽曲。
- (24) 「熱演に拍手の嵐——切り崩せぬ阿里山」『東京華僑会報』第60号、1957年3月11日。
- (25) 「國際兒童節遊芸大会節目單」『校圃』横浜山手中華学校、1958年、49頁。
- (26) 「旅日華僑青年聯誼会」は全国に散らばる華僑青年の親睦を目的として1958年に組織されたが、文化大革命とともに先鋭化した。中華民国政府は同青年聯誼会を中国共産党支持派とみて、その勢力拡大を憂慮していた。
- (27) 村松一弥（1926-2016）東京都立大学名誉教授。中国からの引揚げ経験を持つ人物。
- (28) 中国音楽研究会編『新中国の音楽』飯塚書店、1956年、58頁。
- (29) 中国音楽学院民族音楽研究所編『中国革命民歌選』〔北京〕、音楽出版社、1956年、46頁。筆者が参考したのは1956年2月第二版であるが、同書50-51頁所収の「修訂版後記」の日付は1955年6月25日となっていた。なお48-49頁所収の「後記」の日付は1952年4月21日となっている。
- (30) 1961年にザ・ピーナッツがレコーディングした「草原情歌」も、青山梓・劉俊南作詞のものである。
- (31) 四・六事件。「黄河大合唱」や「義勇軍進行曲」のほか、「太行山上」、「漁光曲」、「鋤頭歌」など抗戦時代の多くの歌曲が禁止された。王受寧「二戦前後左派音楽影射对台湾的影響——回憶音樂國共對峙1931-1976」〔台北〕唐山出版社、2014年、19-20頁。
- (32) 楊春松（1899-1962）台湾桃園生まれ。1924年日本に留学、その後中国に渡り1927年に中国共産党に入党。後に台湾へ戻り農民運動を指導。1938年に再来日。1950年末に中国へ渡り、晩年は全国政治協商會議の委員を務めた。
- (33) 呂水深（1917-1994）1938年来日。1952年9月に中国大陸へ渡り、中央音楽学院で教鞭を取った後に天津芸術学院声楽科副主任の主任を務めた。そのほか台湾民主自治同盟中央常務委員などを歴任した。曹悦孫「一位台湾音楽家の足迹——懷念呂水深先生」中華全国台湾同胞聯誼会編『回帰——記海外帰来的台湾同胞』〔北京〕、華芸出版社、2006年、189-195頁を参照。
- (34) 東京都文京区にある。「後楽寮」として使用されたこの建物は、戦前、満州国留学生のための学生寮「満州国留日学生会館」であった。日本の敗戦により、事業遂行が不可能となって解散した。1946年頃に、日本に残留していた旧満州国の留学生らが同会館を接収して、「中華学友会館後楽寮」と改名し使用した。現在、後楽寮は公益財団法人日中友好会館が運営している。
- (35) 北京日本帰僑聯誼会編前掲書、185頁によると、資料が乏しいとしつつも林は1951年4月に帰国したとなっている。林の帰国年は引き続き検討が必要である。
- (36) 1953年12月10日発行の中央大学華友会『華友会』創刊号所収の「在学生名簿（一九五三年十二月現在）」を見ると、「執行委員劉俊男」の住所は「文京区小石川町一ノ後楽寮」となっていた。
- (37) 郭承敏「ある台湾人の数奇な生涯」明文書房、2014年、112頁。郭は戦前來日の台湾人で、戦後は日本共産党員として活躍し、1950年以降中国に渡る。

- 以降、対日情報工作員として幾度も日本に潜入した。
- (38) 大類善啓『ある華僑の戦後日中関係史——日中交流のはざまに生きた韓慶愈』明石書店、2014年、73頁。韓慶愈は旧満州国出身の残留留学生で、中華人民共和国建国後も日本に残り、中華人民共和国支持の華僑団体に要職を務めた。
- (39) 中音研主催行事の告知は、『アカハタ』の「文化短信」欄によく掲載されていた。
- (40) 「中国音楽研究会九周年記念、新しい中国音楽のつどい」『アカハタ』1961年11月4日、6頁。「合唱団燎原」で再出発」『アカハタ』1962年6月3日、6頁を参照。
- (41) 烏勒吉（1922-2008）熱河省出身。1944年に留学のため来日し、盛岡農林専門学校（現岩手大学）卒業後の1950年より横浜中華学校で教鞭をとった。当時、横浜中華学校の残留留学生教員の多くは、東京の後楽寮と神田寮に住んでいた。黄偉初・張岩松「百年校史」横浜山手中華学校百年校誌編輯委員会編前掲書、100-101頁。
- (42) 烏勒吉が後楽寮に住んでいたことは、前掲『校圃』9頁所収の「一九五八年度教職員職守和地址」から明らかになった。1958年時点も、同校の教職員のなかには、後楽寮や中華青年会館などの寮に住む者が多くいた。
- (43) 横浜山手中華学校百年校誌編輯委員会編前掲書、266頁。
- (44) 横浜中華学校校友会編『横浜中華学校校友会六十周年記念誌』横浜中華学校校友会、2011年では「黄河女性合唱団」と説明されているが、当時の資料には「黄河合唱団」としか書かれていない。既述の『華僑報』のように、「横浜黄河合唱団」となっているものもある。黄河合唱団には少年班もあり、いくつものグループがあった。
- (45) 『黄河黄河合唱団十周年記念（1952-1962年）』出版社不詳、1962年、2頁。
- (46) 「第8代会長曾徳深（第6届卒業生）」横浜中華学校校友会編『横浜中華学校校友会六十周年記念誌』横浜中華学校校友会、2011年、7-8頁。
- (47) 横浜華僑社会に対する中華民国政府の影響力は「学校事件」以降も総じて強いものがあつた。こうした中で、中華民国系の横浜中華学院校舎が改築（現校舎は1969年に竣工）される際には、山手側校友生を中心に反対闘争が展開された。
- (48) 1968年頃より日本政府は従来の出入国管理法の見直しを図ろうとし、1969年2月には「出入国管理法」が上程され、同法の成立を目指した。それは、「その者が守るべき渡航先その他の事項」が定められ、違反時には再入国許可を取消することができるものであること、在日華僑・在日コリアンのなかには反対闘争を展開する者もいた。1969年3月には、同法の制定阻止を目指す華僑青年闘争委員会が結成され、同委員会は他の新左翼団体と共闘して、入管闘争を戦闘的な形で展開した。
- (49) 当時、文化大革命の最中であつて、日本共産党（以下、日共）と中国共産党は決裂し、日本においては、日共黨員やそのシンパを多く抱える日中友好団体や中国関係の学術団体の間で亀裂が生じていた。1967年2月28日、善隣会館（後楽寮）に住む華僑学生と同会館一階に事務所を構える日共系の日中友好協会関係者の間で衝突が発生し、華僑学生は協会事務員を監禁し、3月2日には双方で乱闘流血事件が発生した。この事件をきっかけとして、中華人民共和国を支持する東京華僑総会を始めとした華僑団体と、日共との間で対立が深刻化した。
- (50) 「第8代会長曾徳深（第6届卒業生）」横浜中華学校校友会編前掲書、7-8頁。
- (51) 「横浜中華学校校友会の歴史」横浜中華学校校友会編前掲書、13-19頁。
- (52) 岸良は『新中国の音楽』において「中国音楽地図」を描いている。
- (53) 資料として確認することは出来なかったが、関係者にインタビューを行うと、彼ら日本人教員の多くは当時日本共産党黨員であつたと述べていた。
- (54) 細川廓真「随想」『校圃』横浜山手中華学校前掲、41頁。その細川は、1965年11月3日から1か月間「訪中第三次日中友好協会学習活動代表団」の一員として、北京、上海、延安、東北を訪問している。「細川先生訪中する——日中学習代表団として」『校友会報』162号、1962年11月発行を参照。
- (55) 1953年、外国人の共産主義者は居住国の党ではなく、祖国の党の指導を受けるべきと改められた。これまで日本共産党に所属していた台湾人や左派華僑の運動も、中国共産党の指導に従うヒエラルキーに組み込まれた。この点は、陳來幸「在日台湾人と戦後日本における華僑社会の左傾化現象」前掲書、169-170頁が詳しい。

## SUMMARY

### **Singing “New China” in Japan after the setting sun : through analysis “Wo Ai Wo de Taiwan”**

Okano Shota

The Empire of Japan collapsed after its surrender in World War II. Its nation and people around there were forced to move place to place in a flurry. For instance, Some of Chinese Overseas in Japan went back to Mainland China, and Japanese detainees were repatriated to the country. Some of Chinese Overseas in Japan who supported “New China” sang and spread a song, “Wo Ai Wo de Taiwan (我爱我的台湾)” through 1950s and 1960s. The popularization and propagation of the song in Japan shows a process of Chinese Overseas in Japan acquiring “New China” identity. That is also a key factor that reveals the ways of changing Overseas Chinese’s society in Japan involved into conflicts between China and Taiwan, and communism and anti-communism, which no one experienced ever at that time. In Japan “Wo Ai Wo de Taiwan” united “Taiwan” with “Empire of Japan” and “New China.” That leads us to believe that political identity of Chinese Overseas in Japan on “New China” was formed among people including Japanese detainees and Taiwanese, who were former members of the Empire of Japan.